

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

〈歓喜の歌 An die Freude〉考：  
ベートーヴェンによる歌詞の扱いを巡って

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 千尋, Murata, Chihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1429">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1429</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 〈歓喜の歌 An die Freude〉考

～ベートーヴェンによる歌詞の扱いを巡って～

村田 千尋

### 始めに

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) の交響曲ニ短調 op.125 (第九) 終楽章に置かれたいわゆる〈歓喜の歌 An die Freude〉は、「ヨーロッパ連合 EU の歌」と位置づけられているように、自由を愛し、人類愛を歌う曲として広く知られている。しかし、有名なのは声楽導入部においてバリトン独唱によって歌われる冒頭部分だけではないだろうか。作詞者のフリードリヒ・フォン・シラー Friedrich von Schiller (1759-1805) は次のように歌う。

Freude, Schöner Götterfunken,	歓喜よ、美しき神の火よ
Tochter aus Elisium,	天国から来た乙女よ
Wir betreten feuertrunken,	我ら火の酒に酔って踏み込む
Himlische, dein Heiligtum.	天なる汝の聖堂に。
Deine Zauber binden wieder,	汝の魔法は再び結びつける
Was die Mode streng geteilt,	時流が厳しく分けた物を
Alle Menschen werden Brüder,	全ての人類は兄弟となる
Wo dein sanfter Flügel weilt.	汝の翼が優しく覆うところで。

確かに、「喜びの内に全人類が兄弟となる」という言葉は、欧州連合の統一を歌い上げる歌詞としてふさわしいだろう。しかしながら、この部分だけを取り出して歌うことが、果たして適切な、つまりシラーの意図に沿ったことなのであろうか？本稿では、シラーが歌詞に与えた詩の構造と、ベートーヴェンがそれに対して行った付曲について検討することによって、いわゆる〈歓喜の歌〉の特質を明らかにしたいと思う。

## 1. シラーの「歓喜に寄せて」成立

シラーは1785年に「歓喜に寄せて」を作ったとされている(Fricke 1977: 174)。当時彼は最初の成功作『群盗 Die Räuber』(1781)初演に続く一連の出来事で主君の不興を買ったため、ドレスデンに住む友人夫妻、クリスチャン・ゴットフリート・ケルナー Christian Gottfried Körner (1756-1831)の家に身を寄せていた(小松 1979: 44-47)。その地でシラーは1787年、自ら主宰する雑誌『ラインのターリア Rheinische Thalia』第2巻1786年号(Leipzig: Georg Joachim Göschen, 1787)にこの詩を発表している<sup>\*1</sup>。

この詩は友人達から熱狂的に受け入れられ、フリーメソンの集会などで盛んに歌われたという(小松 1979: 48-51)。『ターリア』には楽譜も掲載されているので、この旋律によって歌われていた可能性もある。この楽譜については、後に検討したい。

この当時のシラーはいわゆる「疾風怒濤時代 Sturm und Drang」のまっただ中におり、自由を希求する強い意志に満ちた詩となっていたが、やがてシラー自身が古典主義的、啓蒙主義的な傾向を強くすると、彼にとって若気の至りから生じた失敗作ということになり、1805年にライプツィヒのクルージュス社 Crusius から出した『詩集 Gedichte von Friederich Schiller』第2巻に収めるために改訂を行っている<sup>\*2</sup>。すなわち、第1節第6行を「時流の剣が切り分けた物を Was der Mode Schwert getheilt」から「時流が厳しく分けた物を Was die Mode streng getheilt」へ、第7行を「乞食も侯爵の兄弟となる Bettler werden Fürstenbrüder」から「全ての人類は兄弟となる Alle Menschen werden Brüder」へ改訂し、最終第9節を全面的に削除したのである。小松雄一郎はこの改訂に対して「革命を示唆するような表現を控えた(小松 1979: 55)」とする。なるほど第9節には死に繋がる表現が多く、フランス革命において国王夫妻がギロチンに掛けられたことを連想させるとも考えられる(革命は作詩よりも後だとしても)。とりあえず、この説を受け入れることとして、本稿ではこれ以上立ち入ることは控える。

\*1 リプリント版(Bern: Herbert Lang, 1969)を使用。電子データがミュンヘンのバイエルン州立図書館電子図書館 Münchner Digitalisierung Zentrum Digital Bibliothek に掲載されている。

<http://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb10616792-2>

\*2 [https://books.google.ht/books?id=EWQHAAAAQAAJ&pg=PA113&hl=ja&source=gbs\\_toc\\_r&cad=3#v=twopage&q&f=false](https://books.google.ht/books?id=EWQHAAAAQAAJ&pg=PA113&hl=ja&source=gbs_toc_r&cad=3#v=twopage&q&f=false) によって見ることができる。

## 2. 「歓喜に寄せて」の詩形式とレトリック

「歓喜に寄せて」は 12 行 8 節(当初は 9 節)からなる。当時、10 節を越える詩もしばしば見られるので、8(9)節という数は珍しくないが、多くの詩は 4 または 6 行、長くとも 8 行で作られるのが常であり、12 行からなるということは大きな詩節によるということができる。

注目すべきは各節前半 8 行と後半 4 行で押韻形式が異なり、後半 4 行の前に、合唱 Chor という指示が書かれているということである。つまり、前半を音頭取り(先唱者)が歌い(=先唱部)、後半は全員(合唱)で声を合わせる(=合唱部)という構造になっているのである。

全行、強弱のリズムを持つトロヘウス Trocheus(強弱格、揚抑格) 4 詩脚からできている。トロヘウスはヤンブス Jambus(弱強格、抑揚格)に次いで多く用いられる詩脚形式であり、力強く、歯切れの良いリズムである。次に示す韻も含めて、全節において定型を守っているので第 1 節の韻律構造を例示し、詩全節は本稿末尾に掲載した。

<p>Freude, Schöner Götterf<u>un</u>ken,          Tochter aus Elis<u>iu</u>m,          Wir betreten feuertr<u>un</u>ken,          Himmlische, dem Heiligt<u>u</u>m.          Deine Zauber binden wi<u>ed</u>er,          Was die Mode streng gethe<u>il</u>t,          Alle Menschen werden Brü<u>d</u>er,          Wo dein sanfter Fl<u>ü</u>gel we<u>il</u>t.          Chor. Seid um schlun<u>g</u>en, Million<u>e</u>n!          Diesen Kuß der ganz<u>e</u>n We<u>l</u>t!          Brüder - überm Sternenz<u>el</u>t          Muß ein lieber Vater wohn<u>e</u>n.</p>	<p>- = 強拍、揚格 Hebung          U = 弱拍、抑格 Senkung          下線は押韻を表す</p>
--	--

前半 8 行の先唱部は 2 種類の韻が交替する交韻、後半 4 行の合唱部は最初の行と最後の行が韻を踏み、中の 2 行が対応する包韻となっており、交韻の偶数行と包韻の第 2・第 3 行が揚格で終わる男性韻、交韻の奇数行と包韻の第 1・第 4 行が抑格で終わる女性韻となっている。前半の先唱部について、最終行が男性韻で終わるということも力強さ、歯切れの良さを作り出している。しかも、男性韻は鋭い子音である [t] (綴りの上では t, th または d) で終わらせることが多く、より決然とした表現となっている。

次に、シラーのレトリック、言葉の使い方について検討しよう。すぐに気が付くこととして、詩節の似た位置に同音／類義語を配置しているということを指摘したい。同じ言葉が繰り返されて強調されていると捉えるべきか、語彙が少なく稚拙であると捉えるべきか、いずれであろうか。

例えば、第 1 節、第 3 節、第 5 節、第 6 節の 11 行目を同じ「星の天空 Sternenzelt」という言葉で終え、特に第 1 節の 11 行目・12 行目と第 3 節の 11 行目・12 行目は非常によく似た言葉遣いとなっている。また、第 2 節は行末ではないがやはり 11 行目に「星々 Sternen」を配置しているため、似たような印象を受ける。更に、第 7 節 9 行目、第 8 節 12 行目にも「星 Stern」が用いられている。「天空 Firmament, Himmel, Sphäre」に関わる表現は第 1 節、第 3 節、第 4 節、第 7 節 (Himmel)、第 4 節 (Firmament, Sphäre) に見られ、「太陽 Sonne」は第 4 節に 2 回、第 5 節に 1 回用いられている。

一方、人類の統合を象徴する「兄弟 Brüder」という言葉は第 1 節に 2 回、第 4 節、第 6 節、第 7 節、第 8 節に各 1 回用いられている (削除された第 9 節にも 2 回用いられていた)。

題名にもなっている「歓喜 Freude」は第 1 節、第 3、第 4、第 7 節の冒頭で歌い上げられ、第 4 節では第 3 行でも 2 回繰り返される。詩節冒頭以外で 'Freude' と歌われるのは第 4 節だけであり、しかも、この節の第 9 行と第 12 行には関連語である 'Froh' と 'Freudig' (いずれも「喜んで」という形容詞) が用いられている。

詩全体の始めとなる第 1 節が目立ち、その詩を代表するということは確かだとしても、「歓喜 Freude」という最重要語句の用いられ方、そして「天空」、「星」、「太陽」、「兄弟」などの使われる頻度も合わせて考えると、シラーは第 4 節にも主張の重点を置きたかったのではないかと思われる。

### 3. 最初の付曲

先にも述べたように、「歓喜に寄せて」の初出であった『ターリア』には、楽譜が掲載されている。右上に [A.] と表示されているだけなので、作曲者は分からない。当時シラーの近辺にいた [K] の頭文字を持つ人物としてはケルナーの名前が挙げられるが、ケルナーに音楽的な素養が備わっていたかどうか証拠はない。後に示すように、やや稚拙な音楽であるため、素人が作曲した可能性もあると思われる。

楽譜は細分活字法によって印刷されている。この当時、『ターリア』の出版地であるライプツィヒではブライトコプフ&ヘルテル社 **Breitkopf und Härtel** がこの方法によって楽譜印刷を行っていたので、同社に楽譜作成を委託した可能性もある。大譜表（上段はソプラノ譜表、下段は低音部譜表）に鍵盤楽器の伴奏を書き、歌唱声部は一番上の音を歌うという、いわゆるクラヴィーア・リート<sup>\*3</sup>の形式で書かれている。

曲は 24 小節（繰り返しがあるため記譜上は 18 小節）の先唱部と 15 小節の合唱部に分けられ、先唱部の後には複縦線が引かれているが、拍子、速度の変化は示されていない。

先唱部の旋律は各行が 3 小節からなる同一リズム [♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪] のフレーズによってできているため、8 行合わせて 24 小節となっている。音域は完全 11 度と広く、半音進行や細かな動き、比較的大きな跳躍も見られるため、簡素な旋律という言葉は当てはまらない。また、上段五線は連桁や符尾を上下に配した 2 声書法で書かれているため、2 声で歌うこともできるであろうが、下段は単音で低い C 音まで要求され、フレーズを繋ぐ音型もあることから、伴奏用と考えるべきであろう。なお、4 行目の 'Himmlische' が 'Göttliche' となっている。

一方、合唱部の冒頭は平行調で始まり、最後は主調で終わっている。合唱部も 3 小節フレーズ（前半とは異なり、行によってリズムが異なる）であるが、最終行を繰り返しているため（旋律もリズムも異なる）15 行という半端な数になっている。先唱部とは異なり、順次進行が主体で平易なリズムであるため、「誰にでも歌える」<sup>\*3</sup> とい

<sup>\*3</sup> 18 世紀後半の北ドイツでは、啓蒙主義的な考え方からリートは教育に役立つべきだと考えられ、誰にでも歌えることが求められた。詳しくは村田千尋 1985 「芸術リートの成立—その 4— 民謡調リートと芸術リート」『音楽学』第 31 巻(1) pp. 52-65、村田千尋 2021 「J.F.ライヒャルトのリート研究：その 2—歌曲集序文から見るリート創作姿勢—」『東京音楽大学研究紀要』第 44 集 pp. 23-47 を参照されたい。

う条件に当てはまる。そして、上段五線が常に3声で、下段が単音で書かれており、そのままホモリズム（全声部が同一リズム）による4声の男声合唱曲として歌うことができる。なお、楽譜の下には「賛美歌の様式に倣って自由な拍節によって歌われる」という注意書きが添えられている。

先にはこの旋律で歌われていた可能性を示唆したが、以上のことを考えると、稚拙で不揃いな旋律構造をしており、その可能性は必ずしも高くないようにも思われる。

#### 4. 1800年前後の様々な付曲

『ターリア』に掲載された「歓喜に寄せて」は注目を浴びたのであろう。しかも、付録楽譜が必ずしも歌い易いものではなかったからであろうか、何人もの作曲家が付曲を試みている。ここでは、筆者の手元にある楽譜及び IMSLP 等で比較的簡単に手に入るベートーヴェン以前の楽譜に限って、その概要を眺めることにしたい。

集めたのは以下の7曲である。

1. Johann Friedrich Reichardt (1752-1814), 1796, *Musikalischer Almanach* 1796 November, Berlin: J. F. Unger.
2. Friedrich Wilhelm Rust (1739-1796), 1796, *Oden und Lieder* no. 31, Leipzig: Grieshammer.
3. F.W.Rust (1739-1796), 1796, *Oden und Lieder* no. 31bis, Leipzig: Grieshammer. 上記に併載
4. ? Johann Abraham Peter Schulz (1747-1800), 1799?, *Volkslied?* (19世紀の民謡集による\*4)
5. Johann Rudolf Zumsteeg (1760-1802), 1803, *Kleine Balladen und Lieder*, Heft VI, no. 11.
6. Johann Friedrich Reichardt (1752-1814), 1810, *Schillers lyrische Gedichte*, I, S. 36.
7. Franz Peter Schubert (1797-1828), 1815 (D189), op.posth.111 (*Drei Lieder*) no. 1.

上記の内、ライヒャルトの第2作(1810)とシューベルトによる作曲だけが改訂後の歌詞によるが、ライヒャルトの第1作は1810年に《シラー抒情詩集》に採録するにあたって、歌詞も改訂している。一方、ルストの2曲は『ターリア』と同じく'Himmlische'が'Göttliche'となっており、更に8行目の'Flügel'が'Scepter'、12行目の'lieber Vater'が'guter Vater'となっているという歌詞の異同がある。'guter Vater'はツムシュテークの付曲にも見られ、当時、『ターリア』以外／以前の歌詞も知られていたことが分かる。

\*4 シュルツの付曲は Erk, Ludwig, 1830?, *Liederschatz* I, Leipzig: C. F. Peters S. 44f.に「作曲者不明、1799年」として掲載されているほか、幾つかの民謡集に見られる。

なお、シュルツとシューベルトはベートーヴェンが交響曲ニ短調を作曲した段階では未出版であった。

これら7曲に共通するのはすべてが純粋有節リートとして作曲されていることであり、作曲された時代と詩形式から考えると当然のことであろう。

そして、前半8行の先唱部と後半4行の合唱部を分け、合唱部の冒頭に **Chor** と書いているという点も共通している（シュルツだけは後の出版楽譜を参照しているため確認できなかった）。この箇所ではルストはテンポの変更を、シューベルトは拍子の変更、ツムシュテークはテンポと拍子の変更を行っている。拍子を変更した2人は、偶数拍子から3/4に変えたという点も一致している。つまり、先唱部と合唱部に大きな区別を付けようとしていることが分かる。

更に、ライヒャルト第1作、ルストの2作、シュルツ、シューベルトは第1行・第2行の音楽を繰り返し、第3行・第4行の歌詞を充てているという点も似ている。

「歓喜に寄せて」付曲概要
?, 1786, Thalia 2.
C-dur 2/4, Nciht zu gesschwind 音域 c1-c2 交韻に一致する旋律の反復
Chor 冒頭 a-moll 3小節フレーズ 最終行の歌詞繰り返し（旋律は異なる）
Johann Friedrich Reichardt (1752-1814), 1796, Musikalischer Almanach 1796 November.
C-dur 4/4, Feierlich froh 音域 c1-a2 再版時(1810)歌詞改訂/ Chor 音域 A"-D
Friedrich Wilhelm Rust (1739-1796), 1796, Oden und Lieder no.31.
E-dur 2/2, Erhaben freudig 音域 h-gis2 歌詞相異/ Chor (etwas lebhafter) 2小節の後奏
F.W.Rust (1739-1796), 1796, Oden und Lieder no.31bis.
A-dur 4/4, Erhaben und mäßig geschwind 音域 e1-fis2 歌詞相異/ Chor 3小節の後奏
? Johann Abraham Peter Schulz (1747-1800), 1799?, Volkslied?
(A-dur) 4/4, (Allegretto *) 音域 h-c2/ Chor 1行目4行目歌詞繰り返し（旋律同型）
Johann Rudolf Zumsteeg (1760-1802), 1803, Kleine Balladen und Lieder, Heft VI, no.11.
A-dur 4/4, Mässig geschwind; mit Ausdruck 音域 dis1-a2 歌詞相異/
Chor 3/4, Langsam und stark
Johann Friedrich Reichardt (1752-1814), 1811, Schillers lyrische Gedichte, I, S.36.
C-dur 4/4, Feierlich froh 音域 c1-g2'/ Chor 冒頭はA
Franz Peter Schubert (1797-1828), 1815 (D189), op.posth.111 (Drei Lieder) no.1, Chor.
E-dur 2/2, Lcbhaft 音域 c1-gis2/ Chor 3/4 斉唱?

その他の点では各曲様々であるが、詩形式に忠実であり、「先唱部と合唱部」という構造は守っているということに注目したい。本頁には各曲の概要を示し、本稿の末尾に各付曲の旋律構成表を載せた。



## 5. ベートーヴェン

それでは、交響曲ニ短調第4楽章でベートーヴェンが行った付曲はどうなっているのでしょうか。まず、バリトン独唱によるレチタティーヴォ以降の楽曲構造の概略を示すことにしよう。

ベートーヴェン〈歓喜の歌〉構造図	
① T.238	バリトン独唱による第1節音頭取り
② T.257	合唱による第1節音頭取り後半（本来の合唱部はここでは歌われない）
③ T.269	独唱（4重唱）による第2節音頭取り
④ T.285	合唱による第2節音頭取り後半（本来の合唱部は歌われることがない）
⑤ T.297	独唱による第3節音頭取り
⑥ T.313	合唱による第3節音頭取り後半（本来の合唱部はここでは歌われない）
⑦ T.375	（第4節音頭取りは歌われずに）テノール独唱による第4節合唱部
⑧ T.411	合唱による第4節合唱部後半
⑨ T.543	合唱による第1節音頭取り
⑩ T.595	合唱による第1節合唱部 <sup>*5</sup>
⑪ T.631	合唱による第3節合唱部
ここまでで歌われる全ての歌詞が提示されるので、以下は省略する	

上記によってはっきり分かるように、ベートーヴェンは詩の構造を改変し、先唱部＋合唱部という構造にも手を加えているのである。

シラーが設定した先唱部と合唱部が本来の組み合わせで歌われることはなく（第543小節から第626小節にかけてだけは、第1節全体が続けて歌われ、第655小節から第729小節にかけては第1節の先唱部と合唱部が同時に歌われる。後者を2重フーガと呼ぶ人がいるが、2つの旋律がクオドリベトのように同時に歌われているのであって、フーガを構成しているわけではないので注意が必要である）、第2節の合唱部は歌われず、第3節の合唱部は先唱部と切り離されて扱われている。そして第4節の先唱部は歌われず、合唱部だけが独唱と合唱によって歌われる。

ではベートーヴェンが先唱部＋合唱部という構造を崩してしまったのかということではなく、第1節、第2節、第3節のいずれにおいても、先唱部の後半4行を合唱部として用い、基本構造は守っている。彼は合唱に先唱部と同じ歌詞を同一旋律で歌

\*5 ベートーヴェンもここで3拍子系の3/2に変更し、続く第3節合唱部にも3/2を充てている。しかし、第1節合唱部がもう一度歌われる第655小節以降、第3節合唱部が2回目に歌われる第730小節以降は2拍子系の6/4としているので、ツムシュテーク、シューベルトと一致しているとは言えないだろう。

わせたかったのであろうか、第4節合唱部についても、まずテノール独唱に歌わせてから後半2行を合唱が繰り返す形にしている。

一方、本来の合唱部は別種の挿入句として使用したということができる。そのため、歌詞の混同が起きたのではないだろうか。つまり、第730小節から第1節先唱部に続いて第3節合唱部が歌われる。構造的には先唱部＋合唱部という形に近い。そして既に指摘したように第1節合唱部後半と第3節合唱部後半の言葉遣いが非常に似ているため、第746小節から第1節合唱部の歌詞に入れ替わってしまっている。これがベートーヴェンの意図か錯誤かということとは分からない。

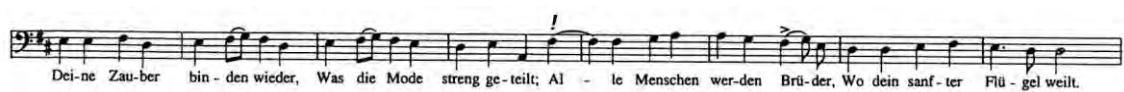
作曲家が詩に向かい合う際に、選択や入れ替えを行うことは珍しくないし、作曲家の意思として許されることであろう。例えばシューベルトは《ます Die Forelle》op.32 D550 を作曲するにあたって最終節を省いた。あるいはローベルト・シューマン Robert Schumann (1810-56)の《献呈 Widmung》においては、6行2節からなる歌詞が全て歌われた後に第1節1行目に戻り、4行目まで歌うといきなり第2節6行目に飛んで曲を終えている。しかし、ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi (1813-1901)が《レクイエム》(1874)において〈怒りの日 Dies Irae〉の歌詞を典礼式文の定めに対して何回も繰り返したことを除けば、ベートーヴェンが「歓喜に寄せて」に対して行った再構成は、もっとも規模の大きなものに数えられるのではないだろうか。

次に、「歓喜に寄せて」の中心思想について考えたい。ベートーヴェンは第1節音頭取りの歌詞を何回も繰り返した。大まかに言うならば4回繰り返し、最後も冒頭2行によって締めくくった。そのお陰でこの歌詞を多くの人が知ることになったのだが、果たしてこれはシラーの意図に沿うものであろうか。先にも述べたように、冒頭詩節である第1節だけではなく、第4節にもシラーは中心的な役割を与えたかったのではないかと考える。ところが第4節の先唱部は一度も歌われず、合唱部もテノール独唱を合唱が繰り返すのみとなってしまった。この箇所は *Alla Marcia* とされており、ベートーヴェン自身も目立たせようとした箇所ではあるが、少なくとも歌詞の繰り返し回数から考える限り、その力が弱まってしまったように思う。

最後に、「歓喜に寄せて」に特徴的な男性終止の力強さについて考えたい。先に述べたように、先唱部の最終行を締めくくることが男性終止であり、その多くを [t] で終わらせることによって、ことさら力強さと歯切れの良さが演出されている。

ではベートーヴェンはこれをどの様に扱ったのだろうか。第 252 小節の'was die Mode streng geteilt, alle Menschen werden Brüder'に見られるように[譜例]、次行冒頭の'alle'を小節線の前にはみ出させてシンコペーションとしたため、決然とした表現は弱まることになっている。もちろん、ベートーヴェンがこの場所に決然とした表現を必要だと考えなかったということであるが、このような拍の先取りによる次行との接続は他にも見られ、歯切れの良い表現を求めたシラーの意図とは異なると考える。

譜例 Beethoven Symphonie d-moll op.125 IV T.249-254 (Bärenreiter TP909)



「歓喜に寄せて」改訂稿全歌詞

- I Freude, Schöner Götterfunken,  
Tochter aus Elisium,  
Wir betreten feuertrunken,  
Himmlische, dein Heiligtum.  
Deine Zauber binden wieder,  
Was die Mode streng getheilt,  
Alle Menschen werden Brüder,  
Wo dein sanfter Flügel weilt.
- Chor. Seid um schlungen, Millionen!  
Diesen Kuß der ganzen Welt!  
Brüder - überm Sternenzelt  
Muß ein lieber Vater wohnen.
- II Wem der große Wurf gelungen,  
Eines Freundes Freund zu seyn,  
Wer ein holdes Weib errungen,  
Mische seinen Jubel ein!  
Ja - wer auch nur eine Seele  
Sein nennt auf dem Erdenrund!  
Und wer's nie gekonnt, der stehle  
Weinend sich aus diesem Bund!
- Chor. Was den großen Ring bewohnt  
Huldige der Simpathie!  
Zu den Sternen leitet sie,  
Wo der Unbekannte thronet.
- III Freude trinken alle Wesen  
An der Brüsten der Natur,  
Alle Guten, alle Bösen  
Folgen ihrer Rosenspur.  
Küße gab sie uns und Reben,  
Einen Freund, geprüft im Tod,  
Wollust ward dem Wurm gegeben,  
Und der Cherub steht vor Gott.
- Chor. Ihr stürzt nieder, Millionen?  
Ahnest du den Schöpfer, Welt?  
Such ihn überm Sternenzelt,  
Über Sternen muß er wohnen.

- IV Freude heißt die starke Feder  
In der ewigen Natur.  
Freude, Freude treibt die Räder  
In der großen Weltenuhr.  
Blumen lockt sie aus den Keimen,  
Sonnen aus dem Firmament,  
Sphären rollt sie in den Räumen,  
Die des Sehers Rohr nicht kennt.
- Chor. Froh, wie seine Sonnen fliegen,  
Durch des Himmels prächt'gen Plan,  
Laufet Brüder eure Bahn,  
Freudig wie ein Held zum siegen.
- V Aus der Wahrheit Feuerspiegel  
Lächelt sie den Forscher an.  
Zu der Tugend steilem Hügel  
Leitet sie des Dulders Bahn.  
Auf des Glaubens Sonnenberge  
Sieht man ihre Fahnen wehn,  
Durch den Riß gesprengter Särge  
Sie im Chor der Engel stehn.
- Chor. Duldet muthig Millionen!  
Duldet für die beß're Welt!  
Droben überm Sternenzelt  
Wird ein großer Gott belohnen.
- VI Göttern kann man nicht vergelten,  
Schön ist's ihnen gleich zu seyn.  
Gram und Armuth soll sich melden,  
Mit den Frohen sich erfreun.  
Groll und Rache sey vergessen,  
Unserm Todfeind sey verziehn.  
Keine Thräne soll ihn pressen,  
Keine Reue nage ihn.
- Chor. Unser Schuldbuch sey vernichtet!  
Ausgesöhnt die ganze Welt!  
Brüder - überm Sternenzelt  
Richtet Gott, wie wir gerichtet.

- VII Freude sprudelt in Pokalen,  
In der Traube goldnem Blut  
Trinken Sanftmuth Kannibalen,  
Die Verzweiflung Heldenmuth - -  
Brüder fliegt von euren Sitzen,  
Wenn der volle Römer kreist,  
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:  
Dieses Glas dem guten Geist!  
Chor. Den der Sterne Wirbel loben,  
Den des Seraphs Hymne preist,  
Dieses Glas dem guten Geist  
Überm Sternenzelt dort oben!
- VIII Festen Muth in schwerem Leiden,  
Hülfe, wo die Unschuld weint,  
Ewigkeit geschwor'nen Eiden,  
Wahrheit gegen Freund und Feind,  
Männerstolz vor Königsthronen, -  
Brüder, gält es Gut und Blut -  
Dem Verdienste seine Kronen,  
Untergang der Lügenbrut!  
Chor. Schließt den heil'gen Zirkel dichter,  
Schwört bei diesem goldnen Wein;  
Dem Gelübde treu zu seyn,  
Schwört es bei dem Sternenrichter!

〈歓喜に寄せて〉 各種付曲旋律構成表

	Thalia =Th	Reichardt 1 =R1	Rust 1	Rust 2	Schulz ?	Zumsteeg =Z	Reichardt 2=R2	Shubert
	C, 2/4	C, 4/42	E, 2/2	A, 4/4 2	A, 4/4	A, 4/4	C, 4/4	A, 2/2
Freude schöner Götterfunken,	A1	A1	A1	A1	A1	A1	A1	A1
Tochter aus Elisium,	B1	B1	B1	B1	B1	A2	B1	A2
Wir betreten feuertrunken,	A1	A2	A1	A1	A1	B1	C1	B1
Himmliche, dein Heiligtum.	B1	B2	C1	C1	B1	C1 間奏	D1	C1
Deine Zauber binden Wieder,	C1	B3	D1	D1	A2	A3	E1	D1
Was die Mode streng geteilt,	C2	B4	E1	E1	A3	B2	F1	D2
Alle Menschen werden Brüder,	A2	C1	F1	F1	A1	A1	G1	B2
Wo dein sanfter Flügel weilt.	C3	B5	G1	G1	B1	B3	H1	E1
	複線					間奏 複線 3/4		間奏 複線 3/4
Seid umschlungen, Millionen!	D1	B6	H1	H1	A4 リピート	D1	A2	F1
Diesen Kuß der ganzen Welt!	E1	B7	I1	I1	C1	E1	B2	F2
Brüder - überm Sternenzelt	D2	B8	H2	H2	D1	F1	A3	G1
Muß eine lieber Vater wohnen.	E2 / D3	B9	J1	J1	A5 リピート	G1	H2	H1
	A-D=JJJJJ E=JJJJJ 3 小節フレーズ	A=JJJ・J B,C=J・JJJ	J のみ倍音値	G,J 倍音値 H-J は Th に類似	A=JJJJJJJJ B=JJJJJJJJ	A=JJJJJJ・JJJJ B=JJJ・JJJJ・JJJ D=JJJJJJJJ	終結部倍音値 冒頭 R1 に類似 ChorR1 に類似	A,D=J・JJJJJJJJ Chor は Z に類似

A, B 等は各曲毎に旋律型の種類を表す。

A1, A2 は同一旋律型の変奏を表す。

網掛けは脚韻構造との一致を表す。

使用楽譜

- Beethoven, Ludwig van (hrsg.v. J. Del Mar), 1999, *Symphonie Nr. 9 in d-moll*, Kassel u. a.: Bärenreiter (TP909).
- Erk, Ludwig, 1830?, *Liederschatz I*, Leipzig: C. F. Peters.
- Erk, Ludwig; Friedlaender, Max, 1928, *Deutscher Liederschatz*, Leipzig: C.F.Peters.
- Fink, G. W., 1842, *Musikalischer Hausschatz der Deutschen*, Gera: C.B.Griesbach's Verlag.
- Gstrein, R; Meier, A, 2005, "Schillers lyrische Gedichte mit Musik von Johann Friedrich Reichardt" *Das Erbe Deutscher Musik* 125, München: G. Henle Verlag.
- Härtel, August, 1865, *Deutsches Liederlexikon*, Leipzig: Philipp Reclam.
- Klaass, Robert; Ailbout, Hans, 1956, *Das goldene Buch der Lieder*, Wiesbaden: Rud. Erdmann Musikverlag.
- Rebbling, Louis, 1870er, *Lieder-Perlen*, Braunschweig: Henry Litolf's Verlag.
- Reichardt, Johann Friedrich, 1796, *Musikalischer Almanach 1796*, Berlin: J. F. Unger.
- Reichardt, Johann Friedrich, 1810, *Schillers lyrische Gedichte, I*, Leipzig: Breitkopf & Härtel. [http://ks4.imslnp.net/files/imglnks/usimg/c/c3/IMSLP321488-PMLP520250-reichardt\\_schillers\\_gedichte\\_bk1\\_40333294X.pdf](http://ks4.imslnp.net/files/imglnks/usimg/c/c3/IMSLP321488-PMLP520250-reichardt_schillers_gedichte_bk1_40333294X.pdf). 参照 8. Jan. 2021
- Rust, Friedrich Wilhelm, 1796, *Oden und Lieder aus den besten deutschen Dichtern*, Zweite Sammlung, Leipzig: Georg August Grieshammer. [http://conquest.imslnp.info/files/imglnks/usimg/5/57/IMSLP509526-PMLP825761-fw\\_rust\\_Oden\\_und\\_Lieder\\_bn\\_5.1-140384.pdf](http://conquest.imslnp.info/files/imglnks/usimg/5/57/IMSLP509526-PMLP825761-fw_rust_Oden_und_Lieder_bn_5.1-140384.pdf) 参照 8. Jan. 2021
- Schubert, Franz Peter (hrsg. v. W. Dürr), 1975, *Lieder Neue Ausgabe sämtlicher Werke. Franz Schubert IV 2a*, Kassel: Bärenreiter.
- Schubert, Franz Peter (hrsg. v. Chr. Martin; W. Dürr), 2019, *Mehrstimmige Gesänge für gleiche Stimmen mit Begleitung Neue Ausgabe sämtlicher Werke. Franz Schubert III 3a*, Kassel: Bärenreiter.
- Schumann, Robert Alexander (hrsg. v. C. Schumann), 1882, *Lieder Robert Schumann's Werke X III, 1*, Leipzig: Breitkopf & Härtel (Rep. 1968, Hants: Gregg International Publishers Limited)
- Verdi, Giuseppe (hrsg. v. D. Rosen), 1990 *Messa da Requiem Le Opere di Giuseppe Verdi III, 1*, Milano: Ricordi.
- Zumsteeg, Johann Rudolf Zumsteeg, 1803, *Kleine Balladen und Lieder*, Heft VI, Leipzig: Breitkopf & Härtel. (Rep. 1969, Hants: Gregg International Publishers Limited)

参考文献

- Ezust, Emily; Rastl, Peter, o. J., Schiller "An die Freude" *The LiederNet Archiv*, [https://www.lieder.net/lieder/get\\_text.html?TextId=14436](https://www.lieder.net/lieder/get_text.html?TextId=14436).参照 8.Jan.2021
- Fricke, Gerhard (HG.), 1977, "Friedrich Schiller Gedichte" Stuttgart: Philipp Reclam Jun.
- 藤本淳雄他 1977 『ドイツ文学史』東京：東京大学出版会.
- 小松雄一郎 1979 『ベートーヴェン第九 フランス大革命に生きる』東京：築地書館.
- 佐藤晃一 1972 『ドイツ文学史』東京：明治書院.
- Schiller, Friedrich von, *Rheinische Thalia* Zweites Heft 1786. (Leipzig: Georg Joachim Göschen, 1787/Rep. Bern: Herbert Lang, 1969). <https://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb10616792-2>.参照 8.Jan.2021
- Schiller, Friedrich von (hrsg. v. S. L. Crusius), 1805, *Gedichte von Friederich Schiller*, Zweiter Theil, Leipzig: Siegfried Lebrecht Crusius. [https://books.google.ht/books?id=EWQHAAAAQAAJ&pg=PA113&hl=ja&source=gbs\\_toc\\_r&cad=3#v=twopage&q&f=false](https://books.google.ht/books?id=EWQHAAAAQAAJ&pg=PA113&hl=ja&source=gbs_toc_r&cad=3#v=twopage&q&f=false). 参照 8. Jan. 2021